

長野県豊丘村でツチイナゴを記録

小林正明

豊丘村でツチイナゴ *Nomadacris japonica* (Bolivar, 1898) を記録したので報告する。

1♂1♀ (成虫)・3exs. (幼体), 15. X. 2004. 下伊那郡豊丘村林原 (標高560m), 山田拓氏採集。

採集地の環境; 農免道路沿いにある村営体育館北側にある多目的広場。しばしば草刈りなどの手入れをしていて、採集当日は30cm位のイネ科の植物が生えていた。

ツチイナゴは暖地系のバッタで、成虫越冬する。そのために寒地には棲めない。静岡県には普通に分布しているが、長野県では南部のごく一部から記録されていただけである。伊那谷にも少し記録があり、この地方の北限となっていた。従来知られていた北限は飯田市川路、飯田市山本等であった。今回の記録はそれらよりもさらに北から記録されたことになる。記録した個体数の数、幼体を含んでいることなどから、同地で繁殖していると思われる。

この記録が伊那谷の温暖化と結びつく証拠はないが、地味な記録を積み重ねていくことが大事だと思われる。

情報を提供していただいた山田拓先生に感謝いたします。

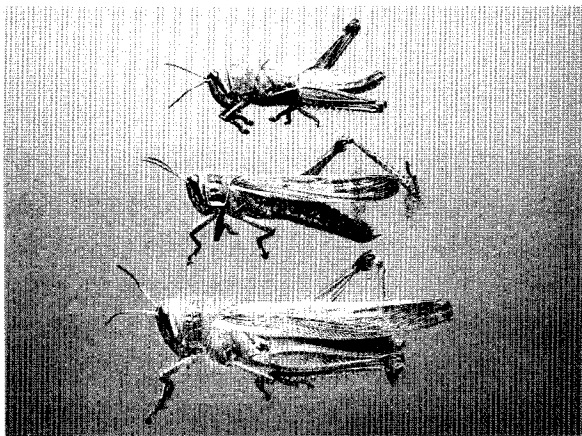


図1 採集されたツチイナゴ (上から幼体, ♂成虫, ♀成虫)
(こばやし まさあき/長野県飯田市座光寺 2155)

長野県大鹿村の珍しいニクバエ科の記録

古田 治

長野県内の双翅目昆虫の記録は研究者も少ないこともあって極めて少ないが、今回、原記載以降記録がないと思われる種、珍しいとされている種を採集しているので報告する。

ニクバエ科の属、亜属の取り扱いには研究者によって異なっているが、今回は T.Pape の取り扱いにしたがって学名を表記した。

カノウハナバチノスヤドリニクバエ

Macronychia kanoi Kurahashi, 1972 (図1)

カノウハナバチノスヤドリニクバエは1972年に倉橋によって記載されたニクバエで、和名にハナバチノスヤドリニクバエと付いてはいるものの、ハチノスヤドリニクバエ亜科ではなくヤドリニクバエ亜科 *Macronychia* 属のニクバエである。頭部の口縁は側面から見て突出しておらず、一般的に良く見るニクバエ *Parasarcophaga* 亜属のハエとは異なっている。膜質部の多い♂交尾器も特徴的で、本邦の同属の他の2種 (エゾハナバチノスヤドリ、ハチノスヤドリニクバエ) とは骨片の形状や膜質部の形状などで識別が可能である (図2)。本種以外の2種は北海道ではRDB (レッドデータブック) 希少種に指定されているが、本種に関しては原記載以降の記録がほとんど確認できないこともあり、またタイプロカリティーが本州 (長野県浅間山と秋田県八幡平) であることもあり、北海道RDBからははずれたものと考えられる。ニクバエ科のモノグラフである *Fauna Japonica Sarcophagidae* の出版後に記載された種なので、同定しにくい種であり、原記載の他には記録の確認ができなかった。

1♂, 2004. Jun. 14, 長野県下伊那郡大鹿村鳥倉林道標高夕立神下 (標高1600m付近)

エダニクバエ *Sarcophaga (Robineuella) scoparia* (Pandelle, 1896) (図3・4)

エダニクバエは1896年にPandelleによって *Robineuella* 属の種として記載され、その後属の移行、統合、などがあり、現在のような取り扱いになったニクバエである。ニクバエ科のモノグラフである *Fauna Japonica Sarcophagidae* の中では珍種とされ、近縁な同亜属2種 *S. (R.) umemotoi* と *S. (R.) pseudscoparia* とは交尾器で見分けることが出来るとある。これまで